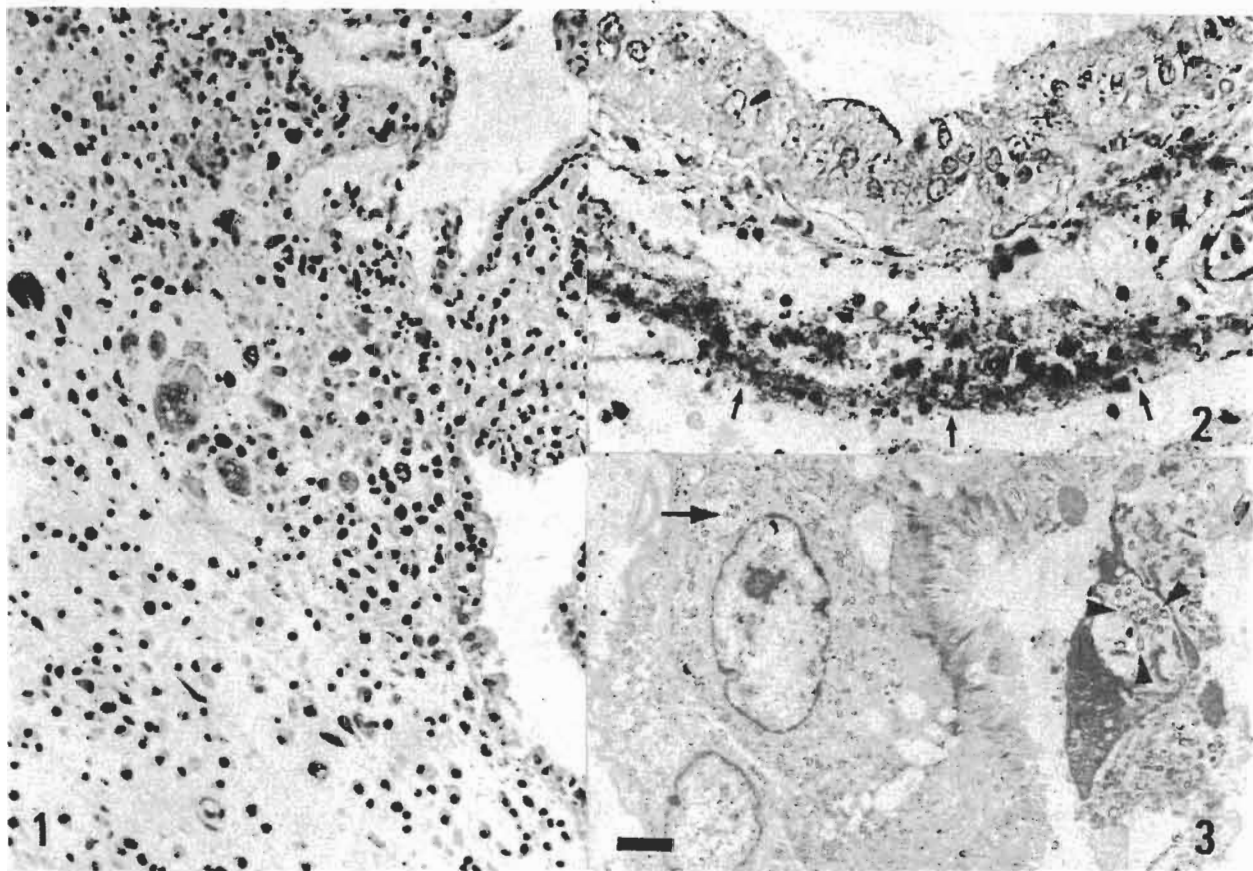


# 豚の胎盤

家畜衛試病理第2研究室・広島県東広島家畜保健衛生所出題 第31回獣医病理研修会No.560



動物：豚，LW，胎齢95日で流産した胎児胎盤。

臨床事項：母豚8頭，種雄豚2頭を飼養する一貫経営の農家で，15ヵ月齢の母豚の1頭が初回の妊娠時胎齢68日で流産した。2回目の妊娠時も95日で流産したために，2週間後廃用にされた。母豚にその他の臨床症状は認められなかった（提出標本は2回目流産時の胎児胎盤）。

肉眼所見：胎児胎盤では，尿膜腔側の表面に径3mm程度の白色隆起が散在していた。母豚の剖検では，膈粘膜に黄色透明な粘液様物が少量付着し，子宮内膜はやや褐色を帯びていた。

組織所見：胎児胎盤では，絨毛膜は肥厚し，その下層に出血・壊死がみられ，絨毛膜間質には巨細胞・類上皮細胞から成る巣状の肉芽腫病変が認められた(図1，HE染色，×200)。また，尿膜腔側の肉眼的な隆起部に一致して変性・壊死病変がみられた。チール・ネルゼン染色陽性の抗酸菌が肉芽腫病変構成細胞，絨毛膜細胞及び尿膜腔側の胎盤の変性・壊死部の変性細胞内に多数認められ，さらに絨毛膜下層の出血・壊死部では細胞外に抗酸菌が増殖している像も認められた(図2，チール・ネルゼン染色，×400，矢印)。絨毛膜細胞内に認められた抗酸菌

は電顕的には，比較的正常構造を保った絨毛膜細胞の細胞質内で巣状に増殖していることが確認されたが，増殖巣の周囲に限界膜などはみられなかった(図3，Bar=2 $\mu$ m，矢印は絨毛膜細胞内，矢頭は浸潤細胞内の抗酸菌)。胎盤のほか，胎児の肝，脾，肺に肉芽腫病巣が認められ，肺では抗酸菌が確認された。母豚では，肝門リンパ節，脾管，子宮，膀胱，腸間膜リンパ節及び内腸骨リンパ節で肉芽腫病変が観察され，このうち，腸間膜リンパ節，内腸骨リンパ節に抗酸菌が確認された。2回目の流産胎児及び母豚において組織学的に抗酸菌が確認されたことから1回目の流産胎児にもチール・ネルゼン染色を行った結果，肝の広範にわたる壊死巣内に多数の抗酸菌が確認された。

考察：全身性の非定型抗酸菌症に罹患した母豚が妊娠した結果，抗酸菌が胎盤を培地として細胞の内外で増殖し，胎盤の絨毛膜あるいは血流を介して胎児に感染，胎児の臓器内で肉芽腫を形成したものと思われた。病原検索を行っていないため，病因となった抗酸菌の血清型を決定することはできなかった。

病理組織学的診断：豚の胎児胎盤にみられた非定型抗酸菌による肉芽腫性胎盤炎。